ヨハネによる福音書 6 章 60〜71 節

「五千人の給食」から始まったヨハネ福音書の 6 章でしたが、今月 いよいよその最終盤に至り、一連の出来事の結末を迎えることになります。イエスの業と言葉に心を興奮させ、その後を追ってきた群衆たち。彼ら そのユダヤの人々ははたして、最終的に イエスにどんな態度を示したでしょうか。今月の 60〜71 節はその様子を記していますが・・・・。

それがなんと、「弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。『実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか』」（60）との、吐き捨てるような言葉から始まっています。事はどうも、そう簡単・単純に済まされるようなものでもなさそうです。そこにはどうやら、信仰の大切な事柄に触れる問いが置かれているように感じられます。

「弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。『実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか』」（60）

・つまり、なんともひどい話だ。そんな話、誰が信じられるかい、というわけです。彼らの苛立ちが見て取れるようではないでしょうか。

・ただ、ここで「ひどい」というのは、言ってることがまるで分からない、理解できない、というのでも必ずしもないようです。

・新約聖書はギリシア語で書かれていますが、その原語のギリシア語では、この「ひどい（σκληρός）」というのは元々、堅い木株の有り様を、しかも そこに節がたくさん集まってゴチゴチと堅くなっている様を意味したといいます。言い換えれば、そのあれこれがそこそこ それなりに分かるからこそ、かえって「そんなの御免だね」というわけです。

・だとしたら、イエス・キリストを追いかけてきた者たちは、イエスが何を言わんとされたのか、そのこと自体は・・・？ はたしてどうだったのでしょうか。

・そして、そうした彼らの態度は、

①イエスが言われる信仰云々にとって どんなことを意味し、

②私たちの信仰の姿勢に どんな問いをもたらすでしょうか。

「このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはや イエスと共に歩まなくなった」（66）

・そのようにして、結果、彼らはどうしたか。それを述べたのが、66 節のこの一節です。「多くが離れ去り、もはや イエスと共に歩まなくなった」と。

・が それにしても、彼らをそうさせたのはいったい、何だったのでしょう？ 彼らがイエスのもとを離れ去ったのは、どんな理由からだったと思われるでしょうか。

「弟子たち」(60、61、66)

・そして もう一つ、読む者の目を惹(ひ)くことがあります。それは、その彼らがこともあろうに、「弟子たち」と呼ばれていることです。しかも、一度ならず、二度三度と繰り返されています (60、61、66)。

・もちろん、これは 12 弟子のことではありません。イエス・キリストを信じるということがどんなことを意味するのか、そのことに思いをあまり深く至らせずに後(あと)を追いかけてきた、いわば 心情的な追っかけとでも言ったらよいでしょうか。

・その意味では たしかに、それまでとは違う、より緩い意味合いでのそれではあります。

・けれども、呼称はどちらも同じく「弟子たち」で、そのような意味でのその「弟子たち」という言い方がヨハネ福音書ではここで初めて出てきます。

・そして、初めて出てきたそのところから、人々が異なる方向へと分かれていく。イエスになおも従う人たちと、イエスに背を向け、そのもとを去っていく人たちとに、です。

・そのようにして また、ここから事態が大きく変わり始め、イエスに対する人々の敵意が増していきます。そして ついには、十字架の死へと、イエスを追いやっていくことになります。

・皮肉とも悲劇とも言える展開ではないでしょうか。

・が そうであればこそ、ここにはやはり、何事か 大切なメッセージが隠されているように思われないでしょうか。もし そうだとしたら、それはいったい、どんなメッセージなのでしょう？

「あなたがたはこのことにつまずくのか」(61)
「それでは、人の子がもといた所に上(のぼ)るのを見るならば・・・」(62)

・それもこれも、彼らが「つまずいた」ことから始まりました。彼らはいったい 何に躓(つまず)いたか、というと・・・

・まず第一に 61 節に言われている躓(つまず)きで、「あなたがたはこのことにつまずくのか」とあるそれです。すなわち、「わたしが命のパンである」と言われたイエスの その 6 章 22 節以下の言葉に、人々はまず躓きました。それは イエスを内に頂くことであり、詰まるところ、イエス・キリストの十字架の死を示唆するものでした。

・そして、これを受け、イエスが言葉を重ねられたのが 62 節でした。「それでは、人の子が〔すなわち、このわたしが〕もといた所に上(のぼ)るのを見るならば・・・」と。つまり、そうしたら もっと躓(つまず)くであろう、というわけです。

・それにしても、それはいったい どういうことなのでしょう？

・次のような背景が理解の糸口になるかと思われます。

①「もといた所に上(のぼ)る」とは、まず 十字架の上に上げられること、そして その後(のちよみがえ)甦 られて 神の御許(みもと)に引き上げられることを意味し、その全体を指す。

②とりわけ ヨハネ福音書で「上(のぼ)る」「上げられる」と言うとき、それは十字架に上げられることを抜きにしては語られず、常に 十字架がその中心に置かれている。

③つまりは、十字架に高く上げられることを通して天に向かい、そこから 神の御許(みもと)に引き上げられる、ということ。

〔参考〕イエスは十字架上で「父よ、わたしの霊を御手(みて)にゆだねます」（ルカ 23：46）と言われて息を引き取られますが、これなどはまさに、理解の良き参考になるのではないでしょうか。

・いずれにせよ、それはいったい どういうことで、
　そして、それがどうして さらにも人々の躓(つまず)きになるのでしょうか。

・そのかぎは、救い主のイメージと そこに寄せる期待にあるように思われます。

①人々が抱く救い主のイメージとは？ そして、その救い主に期待したものとは？

②それに対し、イエスの生き方とは？ そして、イエスがもたらそうとしたものとは？

　両者のそれは同じだったか、それとも そこに食い違いはなかったか、ということです。

・さらには、私たちはそこから、何を学び取ることを期待されているのか。そこに、私たちに向けてどんなメッセージが置かれているのか。私たちはそこから、何を聴き取らねばならないのか、と そのように考えさせられます。

・「実にひどい話だ。そんなの御免だね」と言って「つぶやいた」人々（60～61）と同じようにならないために。

「〔イエスは〕<u>イスカリオテ</u>のシモンの子<u>ユダ</u>のことを言われたのである。
このユダは、<u>十二人の一人</u>でありながら、<u>イエスを裏切ろうとしていた</u>」（71）

・ヨハネ福音書はこうして、イエスのもとを離れ去る「弟子たち」の様(さま)を記しますが、その最後に言及されるのが誰かというと、なんと 12 弟子の一人の「ユダ」その人でした。

・ユダもまた、イエスの思いを受け入れられなかった者の一人だったのでしょう。

・それどころか、「十二人の一人」として 弟子の中の弟子でさえあったユダです。イエスの有りようをよしとできなかった人々の象徴のように記されているのかもしれません。

・問題は ここでも、ユダがなぜ「イエスを裏切ろうとしていた」のか、ということではないでしょうか。その動機はいったい、何だったと思われるでしょうか。

・そして、そんなユダとこの私たちと はたして、関係は有りや無しや？

〔参考〕「イスカリオテ」とは、「ケリオテ出身の人」の意。したがって、ユダは、ケリオテ出身の人であるシモンの子、ということになる。ケリオテは、ユダのケリヨト（ヨシュア 15：25）もしくはモアブのケリヨト（エレミヤ 48：24）と考えられている。

「あなたがた十二人は、<u>わたしが選んだ</u>のではないか。ところが・・・」（70）

・実際、12 弟子の一人までもがイエスを捨てるとなれば、軽々(けいけい)に読み過ごすことはできないでしょう。

・弟子たちの多くが離れ去った。そして、今またさらに、「わたしが選んだ」12 弟子の一人のユダまでもが・・・というのです。

・神に選ばれてここにいるのに、それなのに・・・とは、そこにどんな真理が隠されているのでしょうか。そこから、どんなメッセージを聴き取ったらよいのでしょうか。

「命を与えるのは〝霊〟である。肉は何の役にも立たない。
わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である」(63)

・だからこそ、イエスはこのように言われたのではないでしょうか。
・ここで言われている「霊」とは、いかなるものでしょうか。
・「霊」と対比的に言われている その「肉」とは、いかなるものでしょうか。
・さらに、そこから読み取るべき「命」のこととは？
・そして、それらが「わたしがあなたがたに話した言葉」と結んで言われているということは？
・聖書の信仰について、いま一度 多くを考えさせられはしないでしょうか。

「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。
あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。
あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています」(68～69)

・そして、まさにそのようにしてなされたのが、シモン・ペトロのこの告白でした。
・「神の聖者」とは、イスラエルの人々が呼び名として用いた、勝るもののない最高のものでした。
・ここに、ペトロのどんな思いが感じ取れるでしょうか。

慰め、救い、希望の在り処は？

・今月は、安易にやり過ごすことのできない問いかけが続きました。
・それはいったい、いかなることを暗示しているのか。
・一方で、そのことに思いを寄せつつも、
　ですが、最後はやはり、慰め・救い・希望の在り処を見出せたら、と思います。
・今回の箇所と関わりのある所で、そうしたメッセージを貰える聖書の箇所が想い浮かぶでしょうか。ひと時、想いをめぐらせてみてはいかがでしょうか。
〔参考〕例えば、ヨハネ福音書の 13 章、21 章などはどうでしょうか。